

自己統制としつけ方略が幼児の攻撃行動に及ぼす影響

立教大学 塚本伸一

The effect of children's self-control and mother's child rearing strategies on children's aggressive behavior
TSUKAMOTO Shinichi (Rikkyo University)

The purpose of this study was to investigate the effect of children's self-control and mother's child rearing strategies on children's aggressive behavior. Subjects were 28 kindergarteners and their mothers. A questionnaire assessing child rearing strategies and self-control scale was completed by the mothers. Children's aggressive behavior was observed in a frustrating situation. The following results were obtained: (1) Score on the self-control scale was negatively correlated with measures of aggressive behavior. (2) The frequency of "noninterference" child rearing strategies was positively correlated with measures of aggressive behavior.

Key words : self-control, child rearing strategies, aggressive behavior

攻撃行動を説明する代表的な理論が欲求不満-攻撃仮説である。この説に関しては、従来、様々な角度から批判がなされ、仮説の修正が行われてきた。しかし、そのような修正を考慮すれば、欲求不満-攻撃仮説は現在でも攻撃行動を予測し、予防する上で有効な考え方である(原野 1986, Berkowitz 1989)。たとえば、最近社会問題化している子どものいじめに関しても、この発生メカニズムを検討する際に最も有効な手がかりとなるのが、欲求不満-攻撃仮説だという指摘(木原 1988)もある。

欲求不満-攻撃仮説に対する批判の代表的なものが、攻撃行動は欲求不満によって、直接、一義的に生じる反応ではなく、媒介要因の存在など、いくつかの条件が必要だということである。Davitz (1952) は攻撃行動に対する先行経験の効果を検討している。2群の被験者のうち一方には相互の競争や攻撃に、他方には協力や建設的な

行為に報酬を与えた。報酬に続いて、両群の被験者におもしろい映画を見せるが、クライマックスに達したときに映画を中止し、先の試行で与えた報酬も取り上げて欲求不満状態を作り上げた。すると、先の試行で協力や建設的行為に報酬が与えられた群は、この欲求不満状況でも建設的に対処したが、競争や攻撃に報酬が与えられた群は、攻撃的な態度をとることが多く見られた。すなわち、欲求不満に対して攻撃行動をとるかどうかは、その子どもが過去にどのような経験をしたかが関係しているのである。

近年の批判的研究の多くは、認知過程の重要性を指摘している(大淵 1993)。Dodge (1980) は、被害の大きさが等しい状況下で欲求不満の原因に関する情報を操作して、欲求不満の原因が不合理な要因に帰属された場合には、攻撃の可能性が高まることを示し、欲求不満の原因帰属が攻撃行動の生起を規定していることを明らかにしてい

る。また、Worchel (1974) は、欲求不満の予期が攻撃行動の生起に関連していることを明らかにしている。Berkowitz (1989) によると、こうした攻撃行動にかかわる認知過程は、嫌悪事態の評価、攻撃行動の適切さや機能性の評価という2段階に関与している。

攻撃行動と欲求不満を媒介する要因としては、個人の人格要因も重要である(小嶋 1969)。大淵(1986)は、この要因のひとつとして自己統制力をあげている。自己統制力と欲求不満との関係を検討した研究には、幼稚園児を対象としたBlock & Martin (1955) がある。欲求不満行動としては魅力的な玩具を取り上げた場合の行動が、自己統制力の測定には満足遅延課題が用いられている。その結果、両変数間に有意な負の相関が認められ、自己統制力が高いほど欲求不満行動が少ないことを明らかにしている。

原野(1986)は、「子どもたちは成長する過程で、社会的に容認しがたい攻撃行動を自分で制御する心の働き(自己統制能力)を身につけるため、これが十分形成されていれば、短絡的に攻撃行動にでることは減少する」と述べている。言い換えれば、子どもが欲求不満状況で不適切な攻撃行動を表出せず、適応的な行動をとれるためには、社会化過程で有効な自己統制力を獲得する必要があるということである。しかし、この点を実証的に検討した研究は多くない。また同時に、攻撃行動自体の形成に社会化要因、特に親子関係が与える影響についても、その重要性を従来から多くの研究者(例えば、小嶋 1969、古畑 1969)が指摘しているが、その根拠となる実証的知見は必ずしも明らかではない。

そこで、本研究では幼児の自己統制力を質問紙によって測定し、この自己統制力が欲求不満状況における攻撃行動に与える影響を検討するとともに、社会化の要因として最も重要な親子関係に注目し、攻撃行動に親のしつけ方略が及ぼす影響を明らかにする。

なお、攻撃という構成概念を検討するにあたっては、攻撃者の目標や意図を問題にする考え方と

目標や意図には言及せずに行動の特質とその効果を問題とする考え方がある(小嶋 1969)が、本論では後者の立場をとり、攻撃を「対象に有害な刺激を加える反応」と定義する。

2. 方法

(1) 被験者

被験者は東京都内の幼稚園年長組の男子園児(5歳4ヶ月～6歳3ヶ月)28名とその母親である。被験者は実験群と統制群に分けられる。

(2) 自己統制の測定

塚本(1995)の自己統制尺度を用いた。この尺度は「個人的自己統制」、「対人的自己統制」の2下位尺度、計15項目から構成されている。各項目に対する反応形式は「全くそうである」から「全くそうではない」までの5件法である。評定は母親に依頼した。

(3) 攻撃の測定

①攻撃行動の観察：実験群の被験者は実験者とともに個室に入る。個室の隅にはテーブルが置かれ、その上にテレビゲームとプラスチックのおもちゃのハンマーが置かれている。また、部屋の中央部の床には、ビニール製で高さ1m程のパンチング・ドールが1個とプラレール1組が置かれている。実験者は被験者をテレビゲームの前に座らせ、テレビゲームで遊ばせる。数分後被験者が熱中しはじめた頃、実験者は以下の教示を行い、テレビゲームの使用を禁止した。

「○○君、お姉さん(実験者)ね、忘れ物してきちゃった。それを取りに行ってくるから、このお部屋で待っていてくれる。それからね、このテレビゲームは、とっても大事なテレビゲームだから、お姉さんが帰ってくるまで触らないで待っていて欲しいんだ。その代わりにね、このお人形(ビニールのパンチング・ドール)と、このプラレールでは遊んでいいからね。」

この手続きにより、被験者に欲求不満状況を作り出した。上記の教示をしながら、実験者はパン

チング・ドールを2, 3回揺すって見せる。教示の後、実験者は退室し被験者の行動を観察する。観察は実験室に隣接する観察室のワンウェイミラー越しにビデオ撮影する方法により行われた。観察時間は、実験者が退室してから10分間である。

行動観察より、a)実験者が退室してからパンチング・ドールに攻撃行動が行われるまでの時間(攻撃潜時)、b)パンチング・ドールに攻撃行動が行われていた時間の総計(総攻撃時間)、c)ハンマーを使った攻撃が行われている時間の総計(ハンマー総使用時間)、d)実験者が退室してからはじめてプラレールで遊ぶまでの時間(プラレール潜時)、e)プラレールで遊んでいた時間の総計(プラレール総使用時間)の5つの変数が測定された。測定は筆者と実験者の合議によって行われた。

統制群の被験者は、実験群の被験者と同様に実験者とともに実験室に入る。実験室内のレイアウトは実験群の場合と基本的に同じであるが、テーブルの上にはプラスチックのおもちゃのハンマーだけが置かれ、テレビゲームはない。パンチング・ドール、プラレールは実験群の場合と同じである。実験者は、被験児をテーブルの前に座らせ、数分間会話をする(好きなテレビ番組や遊びについて)。その後、以下の教示を行う。なお、この教示は先の実験群に対する教示から、下線部を除いたものである。

「○○君、お姉さん(実験者)ね、忘れ物してきちゃった。それを取りに行ってくるから、このお部屋で待っていてくれる。このお人形(ビニールのパンチング・ドール)と、このプラレールでは遊んでいいからね。」

この教示とともに、実験群と同様に、パンチング・ドールを2, 3回揺すって見せる。実験者が実験室を退室した後の観察も、実験群の場合と同様である。

②PFスタディ:実験室への入室前と実験手続き終了後の2回、被験者に別室でPFスタディが実施され、GCRが測定された。

(4) しつけ方略の測定

「ぶったり、たたいたりする」、「“良い子はそんなことしないものよ”と言う」、「黙って見過ごしておく」など、10種のしつけ方略を母親に示し、幼児が攻撃等の逸脱行動を行った場合、a)各方略を用いることはどのくらい望ましいか、b)実際に用いているかの評定を求めた。反応形式は、前者が「非常に良くない」から「非常に良い」までの4段階、後者が「よくする」から「しない」までの3段階である。なお、しつけ方略の選択は東・柏木・ヘス(1981)に従った。

3. 結果と考察

(1) 攻撃行動

攻撃行動の各変数の平均値及び標準偏差を群別に示したのが表1である。各変数別に実験群と統制群の攻撃行動の違いを検討するために、各値を対数変換した値について1要因分散分析が行われた。その結果、総攻撃時間に有意差($F(1,27)=4.26$ $p<.05$)が見られ、初発攻撃までの潜時に傾向差($F(1,27)=2.65$ $p<.1$)が認められた。

すなわち、実験群は統制群よりも有意に攻撃時間が長く、実験室で一人にされてから攻撃行動を開始するまでの時間は短い傾向があることが明らかになった。

(2) 自己統制

被験者の自己統制尺度の全体得点及び各下位尺度得点の平均値と標準偏差を群別に示したのが表2である。実験群と統制群の値を比較すると、両群間に有意差は認められなかった。従って、両群の被験者は自己統制力に関して違いはないものと考えられる。

(3) PFスタディ

実験手続き前後の被験者のGCRを、群別に示したのが表3である。これらの値について、2(実験手続前・後)×2(実験群・統制群)の分散分析が行われた。

その結果、交互作用に傾向差($F(1,22)=3.24$

表1 攻撃行動の各変数の平均と標準偏差

	実験群 (N=24)	統制群 (N=4)
攻撃潜時	297.50 (266.25)	600.00 (0.00)
総攻撃時間	54.79 (101.13)	0.00 (0.00)
ハンマー総使用時間	5.46 (14.93)	0.00 (0.00)
プラレール潜時	116.83 (201.09)	154.50 (257.27)
プラレール総使用時間	275.42 (225.25)	445.50 (257.27)

上段：平均値(秒) 下段：(SD)

表2 群別の自己統制得点

	実験群		統制群	
	平均値	SD	平均値	SD
個人的自己統制	21.29	5.10	18.25	3.35
対人的自己統制	15.67	3.72	15.75	2.68
自己統制(全体)	36.96	7.87	34.00	4.18

表3 実験手続き前後の群別GCR得点

	実験群		統制群	
	平均値	SD	平均値	SD
実験手続き・前	59.54	17.71	46.38	27.06
実験手続き・後	55.85	16.30	61.75	13.18

$p=.08$)が認められた。すなわち、実験群では実験手続き前後でGCRが減少する傾向が認められるが、統制群では逆に増大する傾向がみられる。統制群のGCRが増大した理由は明らかではないが、統制群の値を基準に考えれば、実験群のGCRは実験手続きの前後で大幅に低下したと見することもできる。GCRは欲求不満状況における一般的、適応的な対処能力の程度を示しており、この結果は実験群が実験手続き後に、より不適応的、退行的な対処方法をとったことを示すものである。退行も欲求不満に対する典型的な反応である(原野 1969)ことから、これは本実験手続きが被験

者にとって欲求不満状況になっていたことを示唆するものであり、手続きの妥当性を示すものと考えられる。

(4) しつけ方略の評価と使用頻度

幼児の逸脱行動に対する各しつけ方略を母親がどのように評価しているかを検討するために、「非常によい」を4点、「わりにより」を3点、「あまりよくない」を2点、「非常によくない」を1点とし、各しつけ方略ごとに群別及び全体の平均値と標準偏差を求めた(表4)。

実験群と統制群の違いを検討すると、両群間に

表4 しつけ方略の評価

項目	全体	実験群	統制群
1. ぶったり、たたいたりする	3.11 (0.41)	3.13 (0.44)	3.00 (0.00)
2. 「良い子は、そんなことしないものよ。」と言う	2.78 (0.77)	2.74 (0.85)	3.00 (0.00)
3. 首を横に振ったり、「めっ」という顔をしたり、「いけません」というふうに顔で知らせる	2.41 (0.62)	2.39 (0.64)	2.50 (0.50)
4. その子の好きなものやほしがっている物をやらなかったり、しばらくおあずけにする	2.82 (0.82)	2.83 (0.85)	2.67 (0.47)
5. 「ダメ」とか「悪い子ね」などと言って、言葉でたしなめる	2.89 (0.72)	2.96 (0.74)	2.50 (0.50)
6. ほかの部屋に連れていって一人だけしておく	3.00 (0.60)	3.00 (0.65)	3.00 (0.00)
7. 「そんなことをするとお父さんに叱られますよ」と言う。	3.07 (0.70)	3.08 (0.70)	3.00 (0.71)
8. 「そんなことをすると、かわいがってあげませんよ」とか「そんなことをする〇〇ちゃんは嫌いよ」と言う	3.54 (0.57)	3.54 (0.58)	3.50 (0.50)
9. 黙って見過ごしておく	3.54 (0.63)	3.63 (0.56)	3.00 (0.71)
10. 「〇〇ちゃんがしたことは、お母さんはいけないと思うなあ」と言う	1.46 (0.57)	1.42 (0.57)	1.75 (0.43)

上段：平均値 下段：(SD)

有意差は認められなかった。そこで、以下の分析は両群を込みにした被験者全体について行う。

しつけ方略の評価が最も否定的なのは、「8. “そんなことをすると、かわいがってあげませんよ” とか “そんなことをする〇〇ちゃんは嫌いよ” とする」と「9. 黙って見過ごしておく」であり、肯定的なのは「10. “〇〇ちゃんがしたことは、お母さんはいけないと思うなあ” とする」である。各しつけ方略間の評価の違いを検査するために1要因分散分析を行ったところ、有意差 ($F(9,259)=25.00$ $p<.01$) が認められた。さらに、Ryan法により下位検定を行った(表5)。その結果、「8. “～かわいがってあげませんよ” とか “～嫌いよ” とする」と「9.～見過ごしておく」は、他の4つの方略より有意に評価が否定的であり、「10. “～いけないと思うな” とする」は、他のすべての方略よりも評価が有意に肯定的であった。

以上より、母親は幼児の逸脱行動に対して放任的な態度や愛情剥奪的な方略をとることは概して良くないと考えており、ごく穏やかな言語的教示が良いと考えている傾向が認められた。

次に、各方略を実際にどの程度使っているかを検討するために、「しない」を1点、「たまにする」を2点、「よくする」を3点として、各方略ごとに群別および全体の平均値と標準偏差を求めた(表6)。群間に有意差が見られなかったため、以下の分析は両群を込みにした被験者全体に対して行う。

最も使用頻度が高いのは「10. “〇〇ちゃんがしたことは、お母さんはいけないと思うなあ” とする」であり、最も低いのは「9. 黙って見過ごしておく」である。各方略間の使用頻度の違いを検査するために分散分析を行ったところ、有意差 ($F(9,259)=21.43$ $p<.01$) が認められた。

表5 しつけ方略の評価の多重比較

項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	—	ns	>							
2		—	ns	ns	ns	ns	ns	<	<	>
3			—	ns	ns	ns	<	<	<	>
4				—	ns	ns	ns	<	<	>
5					—	ns	ns	<	<	>
6						—	ns	ns	ns	>
7							—	ns	ns	>
8								—	ns	>
9									—	>

<: 縦軸の変数が横軸の変数より有意 ($p < .05$) に小さいことを示す

Ryan法による多重比較の結果を示したのが表7である。これによると、「3.首を横に振ったり、「めっ」という顔をしたり、「いけません」というふうに顔で知らせる」と「10.「～いけないと思うな」と言う」は、他のほとんどの方略よりも有意に使用頻度が高く、また、「6.ほかの部屋につれて行って一人だけにしておく」と「9.～見過ごしておく」は他の4つの方略よりも有意に使用頻度が低い。

続いて、しつけ方略に対する評価とその方略を実際に使う頻度との関連を検討した。「1.ぶったり、たたいたりする」以外、すべての方略で評価と使用頻度の間有意な正の相関が認められた(2: $r = .67$, 3: $r = .50$, 4: $r = .73$, 5: $r = .47$, 6: $r = .55$, 7: $r = .54$, 8: $r = .71$, 9: $r = .65$, 10: $r = .37$, 5及び10は $p < .05$, これ以外は $p < .01$)。

一方、「1.ぶったり、たたいたりする」は評価と使用頻度が無相関であった。このことは、「1.ぶったりたたいたりする」が、良くないと考えていながら使ってしまう「必要悪」的なしつけ方略であることを示しているのかもしれない。また、この方略を使用する際には、使用者にある程度の情緒的喚起、すなわち、「カッとしてぶつ」という状況も予想され、この方略は、理性的な判断や評価に基づいて選択される可能性がある他の方略とは、やや異なる性質を持つのかもしれない。

各しつけ方略に対して、「非常に良い」、「わり

表6 しつけ方略の平均使用頻度

項目番号	全体	実験群	統制群
1	1.75 (0.51)	1.71 (0.46)	2.00 (0.71)
2	1.93 (0.66)	1.96 (0.62)	1.75 (0.83)
3	2.33 (0.67)	2.26 (0.67)	2.75 (0.43)
4	1.78 (0.63)	1.79 (0.64)	1.67 (0.47)
5	2.18 (0.47)	2.08 (0.40)	2.75 (0.43)
6	1.36 (0.55)	1.29 (0.46)	1.75 (0.83)
7	1.61 (0.49)	1.63 (0.48)	1.50 (0.50)
8	1.39 (0.62)	1.33 (0.55)	1.75 (0.83)
9	1.25 (0.51)	1.13 (0.33)	2.00 (0.71)
10	2.61 (0.49)	2.63 (0.48)	2.50 (0.50)

上段: 平均値 下段: (SD)

に良い」を肯定的評価、「非常に良くない」、「あまり良くない」を否定的評価とし、それぞれに該当する人数と比率を示したのが表8である。

さらに、各しつけ方略を実際に行うかどうか

表7 しつけ方略の使用頻度の多重比較

項目番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	-	ns	<	ns	ns	ns	ns	ns	ns	<
2	-	-	ns	ns	ns	>	ns	>	>	<
3	-	-	-	>	ns	>	>	>	>	ns
4	-	-	-	-	ns	ns	ns	ns	ns	<
5	-	-	-	-	-	>	>	>	>	ns
6	-	-	-	-	-	-	ns	ns	ns	<
7	-	-	-	-	-	-	-	ns	ns	<
8	-	-	-	-	-	-	-	-	ns	<
9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	<

<: 縦軸の変数が横軸の変数より有意 ($p < .05$) に小さいことを示す

関して、「よくする」、「たまにする」を「する」、「しない」を「しない」として、それぞれに該当する人数と比率を示したのが表9である。

これによると、「1.ぶったり、たたいたりする」、「2.良い子はそんなことはしないものよと言う」、「5.“ダメ”とか“悪い子ね”などと言って、言葉でたしなめる」の3つの方略は、それぞれ96.4%、70.4%、75.0%の者が否定的評価をしており、肯定的評価をする者よりも否定的評価をする者が有意に (1: $\chi^2 = 24.14$ $p < .01$, 2: $\chi^2 = 4.48$ $p < .05$, 5: $\chi^2 = 7.00$ $p < .01$) 多い。しかし、それぞれ71.4%、74.1%、96.4%の者が実際にこの方略を使っており、使わない者よりも有意に (1: $\chi^2 = 5.14$ $p < .05$, 2: $\chi^2 = 6.26$ $p < .05$, 5: $\chi^2 = 24.14$ $p < .01$) 多くなっている。従って、これらの方略は多くの母親が一致して、良くないと評価しているにもかかわらず、実際には頻繁に使用している方略であると考えられる。この結果は、「1.ぶったり、たたいたりする」に関しては、先述の解釈に一致するものである。

一方、「9.黙って見過ごしておく」は92.8%と有意に ($\chi^2 = 20.57$ $p < .01$) 多くの者が否定的評価をし、78.6%と有意に ($\chi^2 = 9.14$ $p < .01$) 多くの者が実際にも使用しない方略である。また、「10.“○○ちゃんがしたことは、お母さんはいけないと思うなあ”と言う」は、96.4%と有意に ($\chi^2 = 24.14$ $p < .01$) 多くの者が肯定的評価をし、

100%の者が実際にも行っている方略である。評価の方向は逆であるが、どちらも評価と実際の行動が一致している方略である。

(5) 自己統制と攻撃行動との関係

自己統制と攻撃行動との関連を検討するために、実験群を対象に、攻撃行動の各変数と自己統制の全体得点、個人的自己統制得点、対人的自己統制得点の相関を求めたところ (表10)、すべての組み合わせに有意な相関は見られなかった。そこで、自己統制尺度の各項目得点と攻撃行動との関連を検討した (表11)。

その結果、「Q1.目標や目的に向かってがんばることができる」と攻撃潜時に有意な正の ($r = .53$ $p < .01$)、総攻撃時間との間には有意な負の ($r = -.37$ $p < .05$)、プラレールの総使用時間との間には有意な正の ($r = .45$ $p < .01$) 相関が認められた。また、「Q2.課題や義務から気がそれてしまう」と総攻撃時間に有意な負の ($r = -.36$ $p < .05$) 相関が認められた。さらに、「Q10.他の子どもと口げんかや取っ組み合いをする」とハンマーの総使用時間との間に有意な負の ($r = -.68$ $p < .01$) 相関が認められた。「Q13.何でもすぐに手にいれないと気がすまない」と攻撃潜時との間には有意な正の ($r = .36$ $p < .05$)、プラレール総使用時間との間にも有意な正の ($r = .33$ $p < .05$) 相関が認められた。

表8 しつけ方略の評価

項目番号	肯定		χ^2
	人 (%)	人 (%)	
1.	1 (3.6)	27 (96.4)	**
2.	8 (29.6)	19 (70.4)	*
3.	16 (59.3)	11 (40.7)	
4.	10 (37.0)	17 (63.0)	
5.	7 (25.0)	21 (75.0)	**
6.	5 (17.9)	23 (82.1)	**
7.	6 (21.4)	22 (78.6)	**
8.	1 (3.6)	27 (96.4)	**
9.	2 (7.1)	26 (92.8)	**
10.	27 (96.4)	1 (3.6)	**

** $p < .01$ * $p < .05$

表9 しつけ方略の使用度

項目番号	する		しない		χ^2
	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	
1.	20 (71.4)	8 (28.6)		*	
2.	20 (74.1)	7 (25.9)		*	
3.	24 (88.9)	3 (11.1)		**	
4.	18 (66.7)	9 (33.3)			
5.	27 (96.4)	1 (3.6)		**	
6.	9 (32.1)	19 (67.9)			
7.	17 (60.7)	11 (39.3)			
8.	9 (32.1)	26 (92.9)			
9.	6 (21.4)	22 (78.6)		**	
10.	100 (100)	0 (0.0)		**	

** $p < .01$ * $p < .05$

表10 自己統制因子と攻撃行動の相関

	自己統制		
	全 体	個 人的	対 人的
攻 撃 潜 時	0.24	0.20	0.24
総 攻 撃 時 間	-0.05	-0.11	0.05
ハンマー総使用時間	0.07	0.04	0.04
ブラレール潜時	-0.01	-0.02	0.04
ブラレール総使用時間	0.19	0.20	0.12

表11 自己統制項目と攻撃行動の相関

	Q 1	Q 2	Q 3	Q 4	Q 5
攻 撃 潜 時	0.53 **	0.31	-0.24	-0.09	-0.01
総 攻 撃 時 間	-0.37 *	-0.36 *	0.27	0.03	-0.30
ハンマー総使用時間	-0.06	0.25	0.05	0.15	0.04
ブラレール潜時	-0.16	-0.06	0.20	0.12	-0.21
ブラレール総使用時間	0.45 **	0.28	-0.24	-0.12	0.05
	Q 6	Q 7	Q 8	Q 9	Q10
攻 撃 潜 時	0.14	0.23	0.13	0.29	0.24
総 攻 撃 時 間	-0.30	-0.05	0.20	0.09	0.09
ハンマー総使用時間	-0.18	-0.11	-0.23	0.29	-0.68 **
ブラレール潜時	-0.23	-0.02	0.12	0.02	0.11
ブラレール総使用時間	0.21	0.28	0.03	0.31	0.27
	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15
攻 撃 潜 時	0.01	0.14	0.36 *	0.08	0.02
総 攻 撃 時 間	0.12	0.01	-0.22	0.16	0.10
ハンマー総使用時間	0.09	0.18	0.14	0.07	0.18
ブラレール潜時	0.06	0.09	-0.16	0.09	-0.01
ブラレール総使用時間	-0.13	-0.02	0.33 *	0.09	-0.11

** $p < .01$ * $p < .05$

これらの結果は、概して自己統制力が高いことと、攻撃行動を初発するまでの時間の長さ、行われた攻撃量の少なさ、プラレールで遊ぶという非攻撃的・適応的な行動の多さに関連があることを示すものである。

(6) しつけ方略と攻撃行動の関連

しつけ方略に対する母親の評価と攻撃行動との関係を検討するために、両者の相関を求めた(表12)。その結果、「5. “ダメ”とか“悪い子ね”などと言って、言葉でたしなめる」方略を肯定的に評価する程度と攻撃潜時及びプラレール総使用時間にそれぞれ有意な正の($r=.39$ $p<.05$, $r=.38$ $p<.05$)相関が認められた。また「9. 黙って見過ごしておく」方略を肯定的に評価する程度と総攻撃時間に有意な正の($r=.35$ $p<.05$)相関が認められた。

さらに、「10. “○○ちゃんがしたことは、お母さんはいけないと思うなぁ”と言う」方略を肯定的に評価する程度と総攻撃時間、プラレール潜時にそれぞれ負の($r=-.38$ $p<.05$, $r=-.53$ $p<.01$)、またプラレール総使用時間との間に有意な正の($r=.42$ $p<.01$)相関が認められた。すなわち、「言葉でたしなめる」方略や「～はいけないと思うなぁ」と言う方略をよい方略だと評価する傾向と、欲求不満状況で幼児の攻撃が少ないこと、また、「見過ごす」方略をよい方略だと評価する傾向と欲求不満状況で幼児の攻撃が多いことには、明らかな関連が存在するということである。

次に、各しつけ方略の実際の使用頻度と欲求不満状況の攻撃行動との関係を検討すると(表13)、「よい子は、そんなことしないものよ」と言う方略と総攻撃時間に有意な正の($r=.37$ $p<.05$)、「首を横に振ったり、“めっ”という顔をしたり、“いけません”というふうに顔でしらせる」方略と攻撃潜時及びプラレール総使用時間に有意な負の($r=-.46$ $p<.01$, $r=-.35$ $p<.05$)、また「黙って見過ごしておく」方略と総攻撃時間に有意な正の($r=.67$ $p<.01$)、「○○ちゃんがしたことは、お母さんはいけないと思うなぁ」と言う方略と

攻撃潜時に有意な正の($r=.36$ $p<.05$)相関が認められた。すなわち、「よい子は～」と言う、「顔で知らせる」、「見過ごす」といった曖昧な指示や放任の方略を母親がよく使うことと欲求不満状況での幼児の攻撃行動の多さ、また、「いけないと思うな」と言う方略をよく使うことと攻撃行動の少なさに明らかな関連があるということである。

4. 全体的考察

本研究では、幼児の欲求不満状況の攻撃行動に自己統制力と母親のしつけ方略が及ぼす影響が検討された。本項では、まず各攻撃行動及び行動間の関連、これに親が与える影響について述べた後、自己統制が攻撃行動に及ぼす影響について述べる。

本研究の実験場面において、実験群は統制群よりも有意に多くの攻撃行動を示した。実験群と統制群の間には、自己統制力のほか総ての変数で差が見られなかったことから、実験場面における両群の攻撃行動の差は、実験操作の違いに由来するものであると考えられる。すなわち、興味のあるテレビゲームの阻止が実験群の被験者を欲求不満状態とし、彼らの攻撃行動が喚起・促進されたものと解釈できる。本実験操作が被験者を欲求不満状態としたことは、PFスタディのGCRの変化からも明らかである。

続いて、攻撃行動と母親のしつけ方略との関連が検討された。その結果、「よい子は、そんなことしないものよ」と言うや「首を横に振ったり、めっという顔をしたり、いけませんというふうに顔で知らせる」といった指示内容の曖昧な方略や「黙って見過ごしておく」といった放任の方略を使う傾向と、欲求不満状況における攻撃性の高さ、また「○○ちゃんがしたことは、お母さんはいけないと思うなぁ」と言う」といった穏やかな言語的方略を使う傾向と、攻撃性の低さに明らかな関連が認められた。

ところで、しつけ方略に対する母親の評価を調べると、「～はいけないと思うな」と言う」は各方略の中で最も肯定的な評価を受けており、

表12 攻撃行動としつけ方略の評価の相関

	ぶつ	よい子	顔	おあずけ	ことば
攻撃潜時	-0.05	0.09	0.16	0.21	0.39*
総攻撃時間	0.02	-0.26	-0.22	-0.05	-0.10
ハンマー総使用時間	0.03	0.22	-0.08	-0.31	0.15
ブラレール潜時	0.03	-0.13	-0.09	0.11	-0.07
ブラレール総使用時間	0.03	0.12	0.15	0.12	0.38*
	一人	父	嫌い	見過ごす	いけない
攻撃潜時	0.14	-0.05	-0.04	0.11	-0.13
総攻撃時間	-0.21	-0.28	0.05	0.35*	-0.38*
ハンマー総使用時間	-0.20	0.10	-0.07	-0.13	-0.07
ブラレール潜時	0.06	-0.11	0.03	-0.24	-0.53**
ブラレール総使用時間	0.04	-0.08	-0.06	0.10	0.42**

** $p < .01$ * $p < .05$

表13 攻撃行動としつけ方略の使用頻度の相関

	ぶつ	よい子	顔	おあずけ	ことば
攻撃潜時	-0.32	-0.16	-0.46**	-0.07	-0.01
総攻撃時間	-0.29	0.37*	0.20	0.01	0.32
ハンマー総使用時間	0.24	-0.14	0.21	0.30	0.07
ブラレール潜時	-0.30	0.01	0.08	0.15	0.19
ブラレール総使用時間	-0.15	-0.04	-0.35*	-0.22	-0.02
	一人	父	嫌い	見過ごす	いけない
攻撃潜時	-0.26	0.18	0.03	-0.14	0.36*
総攻撃時間	0.21	-0.12	-0.15	0.67**	-0.13
ハンマー総使用時間	0.23	0.12	0.23	0.04	0.05
ブラレール潜時	0.20	0.09	0.01	0.32	-0.04
ブラレール総使用時間	-0.30	-0.01	0.10	-0.11	0.24

** $p < .01$ * $p < .05$

「～見過ごしておく」は最も否定的な評価がされているものであった。上記の結果を勘案すると、それらの評価は根拠のない単なる印象ではなく、少なくとも欲求不満状況における攻撃行動を抑制する上で有効だという経験的知識に基づいてなされているものと推測される。

次に、幼児の自己統制が攻撃行動に及ぼす影響について述べる。実験場面、すなわち欲求不満状況における幼児の攻撃行動と自己統制力との関係を検討したところ、自己統制尺度の一部の項目と攻撃行動と間に有意な相関が認められた。相関の認められた4項目のうち、「目標や目的に向かっ

てがんばることができる」、「課題や義務から気がそれてしまう」、「何でもすぐに手に入れないと気がすまない」は、いずれも即時的な満足を遅延し、特定の行動や課題を遂行する自己統制に関連するものである。これは、満足遅延能力が高いほど欲求不満行動が少ないとするBlock & Martin(1955)を支持するものである。残りの1項目は「他の子どもと口げんかや取っ組み合いをする」であり、対人的な攻撃行動を抑制する自己統制の側面である。従って、上記のような自己統制の特定の側面が欲求不満状況において、攻撃行動を抑制し、より適応的な行動を遂行する能力と関連しているも

のと考えられる。

本研究で使用された自己統制尺度は、これまでの研究から、誘惑への抵抗、DLST、MFFなどの課題と有意な関連を示し、自己統制の認知的、行動的、社会的側面を包括する総合的な自己統制力を測定するものであることが明らかになっている(塚本 1995)。しかし、本研究で、欲求不満状況における攻撃行動と有意な関連が見られたのは、自己統制尺度の特定の項目に限られていた。このことは、欲求不満状況における攻撃行動を抑制する力は、自己統制力の特殊な一部の側面に限定されるものである可能性を示すものである。そして、それは満足遅延能力と関連する側面であることが示唆された。

引用文献

- 東洋・柏木恵子・R.D.ヘス 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達 東京大学出版会
- Berkowitz,L. 1989 The frustration-aggression hypothesis: An examination and reformulation. *Psychological Bulletin*, **106**, 59-73.
- Block,J.& Martin,B. 1955 Predicting the behavior of children under frustration. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 281-285.
- Davitz,J.R. 1952 The effects of previous training on postfrustration behavior. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 309-315.
- Dodge,K.A. 1980 Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, **51** 162-170.
- 古畑和孝 1969 社会的学習 児童心理学講座 第2巻 181-235 金子書房.
- 原野広太郎 1969 欲求不満 児童心理学講座 第6巻 186-229 金子書房
- 原野広太郎 1986 弱いものいじめと攻撃 いじめのメカニズム 79-104 教育出版.
- 木原孝博 1988 「いじめ」の心理 西平直喜・久世敏雄編 青年心理学ハンドブック 917-929 福村出版.
- 小嶋秀夫 1969 攻撃行動とその背景 児童心理学講座 第8巻 219-246 金子書房.
- 大淵憲一 1986 質問紙による怒りの反応の研究: 攻撃反応の要因分析を中心に 実験社会心理学研究 **25** 127-136.
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心 攻撃性の社会心理学 サイエンス社
- 塚本伸一 1995 母子関係が子どもの自己統制に及ぼす影響—自己統制尺度によるアプローチ— 応用心理学研究 **20** 23-32.
- Worchel,S. 1974 The effect of three types of arbitrary thwarting on the instigation to aggression. *Journal of Personality*, **42**, 301-318.